

谷間の道

道

高井有一



谷間の道

定価 五五〇円

昭和四十四年四月一五日 第一刷

著者 高井 有一

発行者 檜原 雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(代)二六五一一二二番
郵便番号 一〇二

印刷 大日本印刷

製本 加藤製本

＊落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

谷間の道 5

一 鯉の群 7

二 兵器庫の店 26

三 遠く明り 46

櫟の家 67

濡れる島影 93

草の色 165

薄暮の顔 187

一 夏の焚火 189

二 遠く日の峠 209

装幀
朝倉響子

谷間の道

谷間の道

一 鯉の群

私は校庭の桜並木の下を、氣象觀測場へ向つて歩いてゐた。並木は正門から校舎を右手に大きく迂回して裏門まで隙間のない枝を連ねてゐる。花の季節が過ぎ、淡い緑の葉は早い午後の陽を映して、洗ひ上げたやうに輝き、地上には微かな風にゆらめく梢の影が濃かつた。大正の終り頃、学校が創立された時に植ゑられたこの五十数本を数へる桜は、揃つた枝ぶりの見事さで広く名を知られ、花の盛りの時期には校庭を一般に開放して、訪れて来る人たちに、殆ど純白に近い花の色を嫋しませてゐた。終戦後二年目の春、グラウンドは掘返して畑にされ、教室には泥と埃の積もつた学校の中で、桜だけが変らない唯一のもののやうであつた。

「おい、菱川、待てよ」

遠くから甲高い声が聞えた。振向くと高城審爾が私を追つて来たのであつた。

「もう帰るのかい」

彼は手を伸ばして私の左腕を固く握つた。上着を脱いでゐるシャツを透して、爪が痛かつた。彼の小柄な体から汗が匂つてゐた。

「黙つてこのまま帰る気かい」

「いや、今日は氣象当番なんだ」

彼が何を考へてさうするのか判らずに私は言つた。私たちの中学では、全員が毎日交替で氣象觀測場の百葉箱に記録された温度や湿度を集計する事になつてゐたのである。

「そんなもの、止めちまへよ」

高城は私の腕を引いて、校舎の方へ戻らうとし、私は抗つた。

「止められるわけないぢやないか。どうしたつていふんだい」

「ちえ」

彼は舌打ちした。

「俺、口惜しくて仕様がななんだ。どうして皆、俺を笑ふんだい。俺がそんなに可笑しいかい」

「何の話さ」

「ごまかすなよ。君だつて笑つたぢやないか。大きな声で笑つたぢやないか。何だつてあんな風にするんだ。俺の言つたのは本当の事なんだぞ」

さう言はれて私は漸く彼の言はうとする事を理解した。午前中に起きた小さな出来事に彼はただはつてゐるに違ひなかつた。

社会科の授業で、教師が社会党が第一党になつた総選挙の結果を見ての感想を私たちに尋ねた。戦後二度目の選挙が行はれたのはつい数日前であつた。

「やつたな、と思ひました」

と最初に指名された生徒が答へた。

「新憲法が公布されたのだから、政治が新しくなるのは当然だと思ひました」

と次の者が答へた。中学三年になつたばかりの彼等は、当時の新聞などに現れた論調をただ口写しに喋つてゐたに過ぎない。教師もそれを知つてゐたであらう。あと二人がほぼ同じ事を述べると、彼は別に期待もしないやうに言つた。

「誰か違つた考への者はゐないか」

「あります」

手を挙げたのは高城であつた。彼は指名される前に、もう立上つてゐた。

「これで、我々の立場が悪くなると思ひました」

戸惑ひに似た短い沈黙ののち、笑ひが拡がつた。それは教室一杯に渦を巻いて、容易に消えなかつた。教師も笑つてゐた。

「今時そんな風に感じるのには珍しいね。その我々の立場とかいふものを、皆に判るやうに説明したらどうだ」

言葉に揶揄の気配があつた。高城はそれを敏感に悟つたらしく赧くなり、暫く絶句した末に言つた。

「左翼が強くなれば、ストライキが勝手にやれるやうになるし、世の中の秩序が壊れてしまひます。それでは我々がこれまで築いて来たものが、全部駄目になつてしまふ」

「財閥は違ふなあ」

教室の隅から声が飛び、また笑ひが湧いた。高城の父は、財閥系の造船会社の社長なのであつた。

「君、さういふ考へ方を誰に教はつたのかね」

教師はやや怯んだやうに訊いた。彼はもう笑つてはゐなかつた。

「父からです」

高城は小柄な体を反らせ、たぢろがずに答へた。その様子に氣押されて、教室は鎮まつた。

「さうか。まあ間違つてゐるとは必ずしも言へないだらう。だがな、高城、物事には、一方からだけ見てゐたのでは判らない面もあるんだよ。これからは、一部の金持だけぢやなく、日本人全部が倅せにならなくてはいけないんだからね。もつと勉強が必要だな」

授業はこれで終つた。授業中に冷やかしの笑ひが起きるのは、さして珍しい事ではない。私は教室を出るとともに、それを忘れた。仲間たちの多くもさうであつたらう。

「社会党が第一党になつたつて、いい事なんて一つもないぞ。赤坂の奴、何にも知らないで、偉さうに言つてやがるんだ」

私が黙つてゐるのを見て、高城は更に言ひ募らうとした。赤坂といふのは教師の名である。

「いいよ、どうだつて。俺には関係ないさ」

私は彼を振切つて、また歩き始めた。その話題に興味がなく、ただ鬱陶しかつたからである。しかし、高城は諦めずに、私の跡に付いて来た。

氣象觀測場は、裏門を出ようとする所に低い白く塗つた柵に囲はれてある。私は百葉箱を開けて中の器械に記録された温度、湿度を集計用のノートに書き写し、足許の芝生に埋められた雨量計を調べた。細かい方眼紙のノートに、陽が眩しかつた。高城は私がそれをする間、芝生に仰向

けに寝転んで眼を瞑つてゐた。

簡単な作業は忽ちに終る。私が百葉箱を閉ぢる音を聞いて、高城が体を起し、眼をしばたたかせた。

「済んだのか」

「ああ」

私はノートを鞆に押込んだ。高城とは直ぐに別れるつもりであつた。

「坐れよ。一緒にこれを食べよう」

高城がポケットから引出した紙包みを抜くと、中には黒い飴玉が幾つか光つてゐて、甘い物に飢ゑてゐた私は、躊ひながらもそれに誘はれ、彼の横に腰を降した。陽を存分に吸つた芝生が快い暖かさを伝へ、校舎から遠く離れたその一面は静かで、頭の周りを飛ぶ羽虫の音が高かつた。

私たちは、暫く飴玉を口に含んで凝としてゐた。観測場から右手の方に疎らな松の木の林があり、その向うにかつてはグラウンドであつた土地が拓けてゐる。其処には、私たちが作業の時間に植ゑた馬鈴薯が白い花を咲かせ、今では用ゐる術のないラグビーのポストが虚しく立つてゐた。

「俺、先刻みたいな事があると、腹が立つて仕方がないんだ」

「またその話か」

私はむきつけに不快な表情を見せたらうと思ふ。しかし、高城は構はずに続けた。

「みんな俺の家は財閥だとか、戦犯だとかつて言ふけど、それこそ可笑しいや。戦争みたいな時には、一所懸命やる方が立派なんだぞ。戦争中はいいい加減にやつて、敗けて左翼が景気よくなると新しい時代だなんて騒ぐのは、一番みつともねえや」

彼は遠い畑の方を真直ぐに見てゐた。

私たちの学校は初等部から高校までを持つ私立の総合学園で、私も高城も初等部以来続けて在学してゐたのだが、私はそれまで、彼とは遠かつた。幼い頃の彼が気管支が弱く冬にはよく咽喉に湿布を巻いて学校へ来てゐたのを僅かに憶えてゐるだけである。彼にしても、この日、格別に私と話したかつたのだとは思へない。屈託してゐる眼にたまたま私が映つたのに過ぎなかつたであらう。しかし、半ば飴の甘さに氣を取られて聞き流してゐるうちに、彼の言葉は私の氣持をいささか揺り動かしただやうであつた。

「戦争で傷めつけられた人だつて多いんだよ」

と私は小さく言つた。自分の家と思ひ出したからである。

私の父は終戦前年の暮に講師として勤めてゐた大学を辞めた。集団疎開で北陸にゐた私は、「今度お父さまが学校をお辞めになりました。いろいろ難しい事情があつたのです。わが家は非

常時なので、あなたもそのつもりで頑張つて下さい」と誌した母の手紙を受取つた。「難しい事情」とは、父の担当してゐた美術の講座が廃止されたためであつたとは、戦後になつて聞かされた事である。山の手にあつた家は私が中学入学のため帰京した直後の四月の空襲で焼かれ、私たちは郊外の父方の伯父の家に八畳一間を借りて同居した。父は北へ向いた明り採りの窓の下に机を据ゑ、終日原稿を書き、それを何処かへ送つてゐたが、何を書いてゐたのかは判らない。かつて書齋の壁を分厚く重く埋めてゐた本が失せた父の身辺は、常に風が吹き通つてゐるやうにうそ寒く思はれた。

戦後、父は別の大学へ勤め始めたが、その地位が以前に較べて恵まれたものでないのは瞭かであつた。母は私に、

「今の学校はお金がかかり過ぎるわ。若しかすると、公立へ変つてもらふかも知れない。さうなつても我慢してね」

と言つた事がある。間借りの生活から脱け出る目処は立ちさうになくとも、私はまだ転校をせずにゐられるだけで、両親に感謝しなくてはいけないのかも知れなかつた。社会党が政権を取り、仮に新しい時代が来るとしても、さうしたものは私には遠かつた。私は戦争といふ不意の災難が齎した不幸を女々しく恨み思ひ屈するばかりで、広く周囲を見廻す眼は持てなかつたのである。